

どろんこ村のファームスティ

わたしたちがファームスティという形で、子どもたちを受け入れるようになったのは1999年。以来、たくさん子どもたちが参加してくれました。そのリピーター率は7割以上で、毎年、参加する子どもたちも大勢います。なかには、1年間、研修生として、どろんこ村で暮らす子どももいますし、大学生のボランティアスタッフとのつながりも増えました。

ファームスティに対する期待は、これからからどんどん大きくなっていくと考えています。農家の経営という面からも、ファームスティは重要な柱となる可能性があります。きっと、今後、どろんこ村のような自給自足の農的暮らしをめざす若者が増えてくると期待しています。わたしたちにとって後継者が現れることは、とてもうれしいことです。

ファームスティに参加したいと思われた方はもちろん、自給自足の農的暮らしに興味を持たれた方は、どうぞ、お気軽にご連絡ください。

■ ファームスティ

日 程	春休み、GW、夏休み、秋、冬休み 2泊3日を基本に夏は4泊や6泊も実施。年間20コース程度実施
対 象	小学生（中・高校生は半分スタッフで料金も半額、大学生はボランティアスタッフ） 定員12名（夏休みは20名）
参加費	2泊3日 20,000円前後（季節により変化）
内 容	季節の遊び、食、農、自然を楽しむ宿泊型の農家体験

■ 育てて食べる暮らしの学校

日 程	5月～12月の期間、毎月3回（土日）実施
対 象	小学生（中学生も可）
参加費	1人1回 3,000円（昼食代込み、当日支払い）
内 容	季節ごとの農家の暮らしを体験する日帰りファームスティ

どろんこ村

愛知県田原市江比間町西砂畑 21-1 〒441-3605
TEL.0531-37-0996 ✉atumi@doronkomura.com

自給自足の農的暮らしの試み

どろんこ村

そでてるたべるつながる





自分以外をそだてる 自分以外をたべる 自分以外とつながる

どろんこ村がめざす農業と暮らし

どろんこ村とは、どんなところか。

大きくくりでいえば愛知県の渥美半島にある農家です。今や全国のトップクラスの生産出荷量を誇る農産地へと成長した渥美半島は、効率的に大量生産をする農業が主流になっていますが、わたしがめざす農業はそれらとは少し違っています。

わたしは、ものを生産するだけを農業とは考えたくなかったのです。生産も、加工も、流通も、販売も、さらには交流も……。それらすべてが有機的に結びついているのが、わたしの考える有機農業でした。

どろんこ村では、冬場にはキャベツ、大根、ブロッコリーを中心に、出荷に耐えうる野菜をつくっていますが、春から夏・秋にかけては、野菜は自家用プラスアルファ程度の量しかつくりません。米もほぼ自家用です。あとはブタが5匹、ヤギが3匹、ニワトリが150羽、犬5匹、クジャク5羽、エミュー2羽、それからアヒルにガチョウにウサギ、フェレットがいます。

この環境のなかで、わたしたちは自給自足の農的暮らしをめざしています。渥美半島の農家で育ったわたしは、子どもの頃に体験した農家の暮らしの心地よさが心の原点にあるからです。山や川や海は遊び場であり、生活の場でもありました。天気によって、その日することが変わり、今、畑にある野菜しか食べることができず 自分の食べるものは自分でつくる。

それは一見不自由なようですが、実に豊かな暮らしだったのです。

そだてること、たべること、それらがすべて自分とつながっていることを実感することは、まさに生きることそのものです。わたしたちがめざしている自給自足の農的暮らしは、暮らしまるごと、すべてが仕事であり、楽しみであり、学びの場であり、いろんなものにつながっていく開かれたものです。

こうした、わたしたちの暮らしの場へ、子どもたちや都会で暮らす人たちを受け入れて、農家本来の豊かな暮らしを体験してもらいたいと思い、1997年にスタートしたのが「どろんこ村」です。

農家の暮らし体験であるファームステイは、おもに春休み、GW、夏休み、冬休みに2泊3日から4泊5日の日程で行い、今では年間20コース、約300人の方が参加するまでになりました。そして、そこからいろいろな出会いも生まれました。わたしのやりたかった、生産するだけでなく、人との有機的な結びつきも含めた農業。それに少しずつ近づいている実感があります。

地球に暮らすすべての人々が、今の日本人の平均的な暮らしをしたら、地球が2.5個必要といわれています。わたしたち日本人は、非常に恵まれた暮らしをしているのは事実です。しかし、今のままの暮らしをこの先も続けていくことができるかどうか、それは極めて疑問です。わたしたちは、暮らしを見直す時期にきているように感じます。どろんこ村がめざしている自給自足の農的暮らしは、そうした問題に対するわたしなりの解答でもあります。わたしたちは、これからも、どろんこ村を通じてたくさんの人たちと出会い、本来の農的暮らしの楽しさを感じてもらうことで、これからどのように暮らしていくのか、みんなと一緒に考えていきたいと思っています。

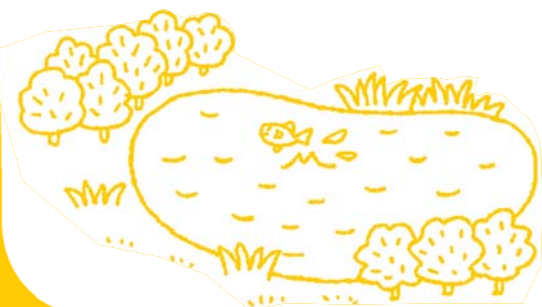
小笠原 弘





らしまるごとまなびの場

どろんこ村のファームステイ



どろんこ村のファームステイが、ほかのキャンプや農業体験と異なるのは、わたしたち農家の暮らしの場に子どもたちを受け入れているところです。ブタのエサづくり、ヤギの乳搾り、早朝の卵拾い、旬の野菜の収穫といった毎日行う農家の日常の仕事、そしてそれらを使った料理、季節ごとに変わる自然リズムに合わせた遊び……。

そういった農家の暮らしをまるごと体験することによって、子どもたちは学校の教科書からは得ることができない何かを、心と体で感じるでしょう。

もうひとつ、どろんこ村のファームステイの特徴は、指導者がいないという点です。子どもたちと寝起きをともにして体験をサポートするのは大学生のボランティアスタッフや若い研修生たちです。彼らも子どもたちと一緒に体験をしながら、農業から学び、子どもたちから学びます。

一度ファームステイを体験した子どもたちの多くは毎年参加するようになっています。そして、子どもたちは、ファームステイが終わった後も、ボランティアスタッフとの交流を続けています。将来、ファームステイを体験した子どもたちの何人かはスタッフとしてどろんこ村に関わってくれるだろうと考えています。そうした、ひととひとのつながりも、わたしたちがファームステイで大切にしていることとのひとつです。

季節によって変わる体験プログラム

春はいろいろな命が動き出す季節です。畑や野原、山で小さな春を感じます。キャベツリレーやダイコン抜きコンテスト、ヤギとピクニック、野草量など。

GWの5月は田植えの季節。田んぼのおもしろさ、不思議さを感じます。田んぼをぐちゃぐちゃに混ぜて代掻き、田植え。三河湾での潮干狩りなども行います。

夏は海から山まで、いろんなところで遊び、水の循環を感じます。田んぼで遊び、その水を育む山で遊び、水の流れる川で遊び、海で海水浴をします。

秋は稲刈りや芋掘りなど収穫の季節。食べ物を得られるありがたさを感じます。収穫作業のほか、脱穀・粳すりしてご飯炊きなど、「食」の体験をたっぷりします。

冬は渥美の野菜が一番美味しい季節。大豆を炒り、きな粉をつくって、もちつき大会。冬野菜を収穫してジャンボ鍋をつくります。



どろんこ村はこんなところ

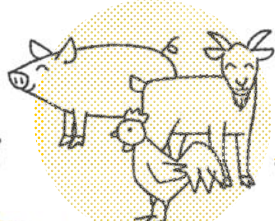


また少し離れたところにブタ小屋があります。にわとりもいます。近くに畑、田んぼ、ため池があります。子どもたちは、そこで田植えをしたり、野菜を収穫したり、どろんこになって遊んだり。

そだてる・たべる循環

ブタや野菜をそだて、わたしたちは肉やソーセージ、野菜といった食べ物を得ます。そして、食べ残しはブタのエサになり、ブタのフンは畑の肥やしに。その結果、ブタや野菜がそだち、わたしたちは肉や野菜を得る……。どろんこ村では、こんなふうに、そだてること、たべることがつながっています。

近所の豆腐屋さんからもらってきたおから、魚屋さんからもらった魚のアラもブタや動物たちのエサになります。



にわとりは、タマゴのほか、時々つぶして肉を食べます。ヤギのミルクでケーキをつくります。

ブタは大きく育てて肉やソーセージ、ハムにして食べます。

ブタのためにつくったお米、海水



人間の食べ残したご飯やおかず



いただきます

大鍋でぐつぐつ

どろんこ村から少し離れた場所に、にわとり小屋があり、150羽が飼われています。

にわとり小屋



ファームステイを体験した子どもたちは、わずかな期間のあいだにたくましくなります。たくさん食べるようになり、嫌いな食べ物を食べられるようになり、よく話すようになり、汚れることが平気になり、動物にさわられるようになります。



だて る つ な が る

どろんこ村のファームスティは、
お米や野菜をそだてたり、動物をそだてたり、
地域の人との関係をそだてたり、そしてそれらが
すべて自分とつながっていると感じることを学びます。



米や野菜を栽培して、そだてる。ブタのエサをつくり、世話をする。自分の食べものは自分でつくる。働かないと、食べられない。お金を払えばすぐに食べ物が手に入る都会の生活とは違って、農家の暮らしは一見、とても不自由です。しかし、その不自由さのなかに、生きているという実感や豊かさがあります。

山で降った雨が川を通して田んぼや畑を潤し、海に流れる。海も山も川も田んぼも、植物も動物も、そこに住む人間も、別々に存在しているわけではなく、それぞれが密接にかかわり合い、つながっている。そのつながりを実感できること、それこそが豊かな暮らしだと考えています。

ファームスティに参加した子どもたちにも、そうしたつながりを実感してほしいと思っています。





べるつながる

どろんこ村のファームスティは、
たべることは命をいただくということ、
たべることで、世界と自分がつながっていることを感じます。



お金を出せば、いろいろな食べ物が季節を問わず食べられる今、子どもたちは食べ物に「命」があることを知らずに育っています。

ファームスティでは、田んぼの米、畑の野菜、自分たちがお世話したブタの肉、ヤギのミルク、鶏の卵などを使って料理します。子どもたちには、それぞれの命をいただいているということ、わたしたち一人ひとり、他の命をもらって生きているということを感じてほしいと思っています。それは自分のからだは、他の命とつながっているということです。

それともうひとつ、食べること、「食」は人と人を結びつける力があります。子どもたちは、「食」を通じて、いろいろなことに気づき、学んでいきます。

